2　大学院

2.1　大学院修士課程

1　大学院修士課程委員会の活動

本学の修士課程は，学際的な専門教育を授け，高度の専門職業人の養成と，社会人の再教育を行うことを目標としてきた。平成16年度よりの国立大学法人化のための，大学全体の委員会である将来設計検討委員会の提言を受け，本年度は，修士課程の組織改革および再編の方向を定めることが全学的な重点課題になった。すなわち博士課程への再編，専門職大学院への転換・創設の二本柱であり，修士課程委員会および各研究科レベル，また博士課程大研究科レベルで，改革案と将来設計について活発かつ集中的に議論した。しかし，特に学際的な教育を標榜した研究科では，この二本柱がすんなりと受け入れられない状況でもあった。ただ議論を重ねていくうちに，高度専門職業人の養成の目的を鮮明にしながら，各研究科の量・質とも拡充を期し，“ 足腰を強くする ” という目標に集約された。各研究科においても，教育目標，教育課程の見直しと改善策について全面的に検討が行われた。

研究科レベルでの教育課程の見直しは，地域研究研究科では，留学生向けの１年制英語プログラムを創設し，JICAとの協力の下，海外からの優秀な留学生の確保に努めた。また，ヤング・リーダース・プログラムの設置に向けて準備を進めている。教育研究科では，現職教員を対象とした１年制プログラムを明年から開設することになった。これは，大学院休業制度や都道府県教育委員会派遣の現職教員で，既に十分な現場経験を有している者を対象としている。経営・政策科学研究科では，JICA-JDSによる途上国有職者のキャリアアップに貢献するための国際マネジメントプログラムの学生選抜を開始した。MBAコースでは，グループ作業によるフィールドワークを特定課題研究として学生の評価を行った。また，政策分野の高度職業人にふさわしい学位として，修士（公共政策）英語名MPPを追加し，MBAコースの重点エリア “ マネジメント・パブリックアドミニストレーション ” の修了者に授与できるようにした。環境科学研究科では，教育方法の多様化と教育機会の多面化をはかる一環として連携大学院方式を実施した。体育研究科では，概算要求されていた専攻増が４年がかりで認められ，平成15年４月からスポーツ健康システム・マネジメント専攻として発足する。

修士課程のこれらの教育実績に対し，外部の評価も高まりつつある。バイオシステム研究科の，日中学術交流の拠点大学として，国際的な学術交流の実績は年を追うごとに評価されている。理工学研究科および環境科学研究科では，今年度から始まった優秀な学生に対する学長表彰者を輩出し，指導教員も高い評価を得ている。芸術研究科では，学生が全国レベルの賞を受け，その活躍が注目されている。体育研究科では，学生・教員が世界における競技会等で活躍し，本学の評価を高めている。

社会との連携を強化し，優秀な受験者を獲得するため，広報活動を強化し，社会に開かれた大学院・大学展に継続的にかつ積極的に参加したり，ポスター，研究科案内，修士課程案内などの広報文書や全研究科のホームページを整備し，情報発信に努めた。また，推薦入試枠の拡大も経営・政策科学研究科，理工学研究科で行われた。

2　教員の教育業績評価の状況

一部の研究科では，自己点検・評価委員会を設けて，教員の教育業績の評価を行ったり，一部の講義で学生による授業評価が試みられている。また，各研究科とも人事を活性化することに努め，その選考過程に教育業績が重視されている。

3　自己評価と課題

本学の修士課程は，全研究科が特色のある教育活動を行っていることに対して社会的な評価も得られつつある。しかしながら，ここ数年の国の厳しい予算状況を反映して，概算要求では目立った成果が得られていない。これまでの成果と実績を生かしつつ，時代の要求に応える大胆な将来設計が必要である。また，国立大学法人化を迎える現在，大学の大きな組織のどの位置に “ 足腰の強い修士課程 ” を置くのかが今後の重要な課題となる。